

## 岩出博先生の追悼にあたって

日本大学経済学部長 小 棚 治 宣

岩出博先生は、昭和47年3月に慶應義塾大学商学部を卒業後、ブリヂストンタイヤ株式会社で5年間勤務し退社、本学大学院経済学研究科博士前期課程に入学し、研究者への途を歩まれることとなります。昭和54年4月に博士後期課程への入学と同時に、本学部の助手に採用され、専任講師、助教授と順調に昇格されたのち、平成2年4月に教授に就任しました。同年9月には慶應義塾大学から商学博士の学位を授与されています。教授昇格後は、本学部において学務委員会副委員長、大学院委員会副委員長、大学院担当を歴任したのち、平成19年4月には学部次長（第二部担当）の要職に就き、平成28年3月までの実に9年間務めることとなります。その間、学部自己点検評価委員会委員長やカリキュラム検討委員会委員長を兼任していた時期もありました。この9年間は私が学部長を務めていた時期であり、岩出先生なしには長期の学部運営は難しかったであろうと思えるほど、みごとな手腕をふるっていただきました。決して自らは目立とうとなさらずに、ソフトに難題を解決に導いていく——その手並は抜群でした。決して声を荒げることなく、論理的に相手を説得していくその姿から、私は多くのことを学ばせていただきました。それは、岩出先生が残してくれた遺産でもあると思っています。

岩出先生は、研究面でも、多くの優れた業績を残しています。単独の著書だけでも8冊（増補版や改訂版を含めると14冊）にのぼり、その内の『アメリカ労務管理論史』は経営科学文献賞（1992年）、『戦略的人的資源管理論』は日本労務学会会長賞（2004年）を受賞しています。また、学会活動にも積極的に、日本労務学会並びに産業・組織心理学会の理事や常任理事を長年にわたって務めておりました。

さて、私が岩出先生のことを想うとき、まず頭に浮かんでくるのは、少しでも時間があれば、文庫本を読んでいる姿です。それも研究書ではなく小説で、とりわけ専攻の労務管理論とも相通ずる企業小説は、過去のものから直近のものまで、そのほとんどに目を通していただいていたのではないと思えるほど精通していました。何しろ読むスピードが半端でなく速い上に、企業を舞台としたミステリーや純文学までも守備範囲としていました。そうした旺盛な読書の結果として生まれたのが、岩出先生の著書の中でも異彩を放っている『小説で読む企業ガイド』（1999年）に他なりません。この本の「はじめに」の一節を紹介してみましょう。

〈サラリーマンがその読者の多くを占める企業小説の魅力は、企業社会に生起する「実感としてわかる」身近な事象を小説という凝縮したかたちで情報提供してくれることにある。多くの企業小説が、実際に起こった事件を材料にしたり、また作者の個人的な体験を踏まえて描かれたものが多いことから明らかなように、企業小説が織りなす世界は、現実の企業社会を映す「限りなくノンフィクションに近いフィクション」の世界であり、思えば自らも体験したことのある世界なのである。〉

このちょっと硬めの語り口でものごとの本質をズバリと言い当てるあたりは、まさに岩出先生の真骨頂であるといえましょう。どんな些細なことにも論理的な思考を巡らし、解決策を求めていく岩出先生の姿が、今も脳裏にはっきりと浮かんできます。そして常に品格のあるユーモア精神をも兼ね備えていたことも。

(ii)

岩出先生は、若手研究者を育てることに熱心で、本学部の加藤恭子先生をはじめ、多くの大学院生の指導にあたり、研究者としてあるべき姿を伝えてくれました。岩出先生の精神を継承した研究者がこれからも活躍してくれるものと確信しています。

最後に、岩出博先生のご冥福を心よりお祈り申し上げて、追悼の辞といたします。

(2020年5月3日)